



研究の現場から

人間学研究室の
研究動向

— 道徳科学研究センター研究室 —
生命環境
社会科学
人間学
教育
廣池千九郎
歴史
伝統文化

廣池千九郎と近代

人間学研究室 客員研究員 ピーター・ラフ

廣池千九郎を総体的に理解するためには、彼を取り巻く状況——生きた場所と時代背景——を注意深く観る必要があります。というのも、それがモラロジィを生み出しただけでなく、その本質の部分を形成したからです。もし、廣池が九州以外あるいは外国で、しかも一世紀以上に生まれていたら、モラロジィは今日、存在していなかったでしょう。

それでは、廣池千九郎の世界を形成した決定的なものとは何だったのでしようか。それは「西洋化」であるとしばしば言われています。なぜかといえば、彼が育った当時の日本が「西洋化」への大変革の真ただ中にあったからであり、それらの多くが伝統を破壊するものであったからです。これにより、モラロジィのような斬新な思想

が生み出されたのですが、それは、まさに必然的な流れであったのです。そもそも「西洋化」とは何なのでしようか。それはおそらく、国が存続するために必要であると思われるものだけを西洋から取り入れようとした過程を通して、日本を近代に適応させる試みであったと見るのが適切でしょう。しかし、その試みは、しばしば望ましくない結果を招きました。

結局、廣池千九郎の人生と業績を形作ったのは、「西洋化」というフィルターによって濾過された「近代」だったと言えます。しかし、それでは「近代」とは何だったのでしようか。それは、一般的に西洋で始まったと言われており、その意味と歴史は長い間、激しい議論的となり、私の現在の研究の対象でもあります。「近代」の表面

的な特徴である科学、技術、都市化などは、西洋以外の場所に移しても取り入れることができますが、一方、その精神は、西洋に支配されている世界の領域に必ず限定されるのです。「近代」の起源は、西洋文明の基盤の深刻な分裂——ギリシア・ローマ思想の倫理とキリスト教道徳の断絶——から生じました。これら二つの要素を統合するためのいくつもの試みはどれも成功せず、二つの立場はイタリヤ・ルネサンスの人文主義によって分離し、現在まで続く西洋文明における内戦が始まりました。その闘争とは根本的に、「人間とは何か」と「いかに生きるべきか」に関する二つの正反対かつ互いに交わらない見解なのです。「近代」は、本質的に「倫理」がどのように拒否されたのかの物語ですが、「道徳」で置き換えることができず、その過程で混乱が生じていると言えます。

私の次なる課題は、この紛争が明治維新後の「西洋化」とともに、日本にどれだけ取り込まれたのかということ、そして廣池千九郎が、二つに裂けたままの西洋と日本をモラロジィによってどのように癒そうと設計したかを解明することです。

(訳：竹内啓二客員教授、竹中信介研究員)